



コミュニティデザインという分野を広く知らしめた山崎亮さんがこの道に進んだのは、阪神・淡路大震災での体験が大きなきっかけだったそうです。コミュニティに分け入り、たくさんの人びとの話に耳を傾けながら活動している山崎さんは、災害時の備えについてどのように考えているのでしょうか。

水を備蓄するのは誰のため？

「災害のために備えましょう」。そう促されてペットボトルの水をたくさん用意するのは、あなた個人が助かるためだけにやっているのでしょうか？ みんながそれを常に考えられるような社会になるというなと思っています。

個人主義的に「水を用意しておく」「自助」と考えれば「隣近所がどうであれ、自分だけは助かるために備える」となります。水をはじめ備蓄用品を売る側も「あなたと大切な家族を守るために」と呼びかけるので、そう思い込まされているだけかもしれません。

印象的な話があります。東日本大震災のとき、避難所となっていた体育館で「私は大丈夫ですから、ほかの人のところに行ってください」と言う人が多かったそうです。私だったら大きな被害を受けて、う言えるかどうかかわりません。

自分が助かるためではなく、助

けが必要な人に手を差し伸べてもらうために備えておく——この感覚は、個人主義的な思考回路からは生まれません。少し余分に水を準備しておけば、たまたま水を用意していなかった人に「よかったらどうぞ」と渡すことができます。それは自助でありながら、自助を超えた共助にもつながる。とても大切な思想だと思います。

人が抱える欲求を二つに分けて考える

「私は大丈夫。備えはしておいたから」と言えるようになるには、「個人」と「社会」の関係を考えることが一つの道標です。

私たちは資本主義と社会主義を対峙する概念と捉えがちですが、資本と社会は対義語ではありません。これを読み替えると、根底にあるのは個人と社会です。まず個人がいて、その個人が複数になって形成される社会がある。個人と社会のバランスがとれている状態がもっとも好ましいはずで

ところが大量消費を前提とした今の社会では個人を、正確に言うところ個人の欲求を煽るばかりです。そうした方が商品やサービスは売れますからね。人間の欲求に限りはないのだといわなければ、あれも買え、これも買えと私たちは常に煽られつづけています。

ところがイギリスの経済学者、ケインズは、人間の欲求は一つではなくて二つに分けられると定義しました。一つは衣食住に代表される「それがないと生きていけない」絶対的な欲求です。もう一つは高級車やブランド品など「所有していると他者に優越感を抱ける」相対的な欲求です。

絶対的な欲求を「第一の欲求」、相対的な欲求を「第二の欲求」とします。私たちはこの二つの欲求を混ぜ合わせて自分の欲求だと思いついて入っている、まずは生きていくために必要な第一の欲求がどこまでなのかを考えてみましょう。きつと「ここまでは必要。だけどもうこのブランド品はいらない」と見極められるはず。すると、今までは第二の欲求に費やしていた部分が空きます。この空きが「余剰」です。

余剰にはモノを買い取るような目に見えるものと、時間や知識、経験など目に見えないものがあり

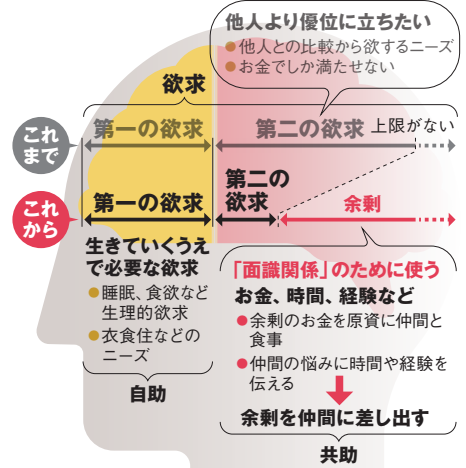
インタビュー

山崎 亮さん

コミュニティデザイナー
関西学院大学建築学部 教授

YAMAZAKI Ryo

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学農学部にて増田昇に師事（緑地計画工学専攻）。メルボルン工科大学環境デザイン学部にてジョン・バージェスに師事（ランドスケープアーキテクチャ専攻）。大阪府立大学大学院（地域生態工学専攻）修了後、SEN環境計画室勤務。2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を、地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。



studio-L提供図をもとに編集部作成

みんなが余剰を出し合う「面識経済」

自分と面識のある人たちが自らの余剰を差し出し、受けとり合う生活を想像すると愉しくなりますよね。私は、そうした面識関係Ⅱ顔が見える関係にある人たちでつながって行なう経済活動を「面識経済」と呼んでいます。

コミュニティが希薄な都市部でもできること

都市部は、中山間地域や離島に比べ人間関係が希薄なのは否めません。しかし、新たにコミュニティをつくる方法があります。

社会学では地縁をもとに生活全般でつながっていくものをコミュニティ、共通した興味でつながるものをアソシエーションと使い分けてきました。私は前者を「地縁型コミュニティ」、後者を「興味型コミュニティ」と言い換えています。

ます。都市部で地縁型は難しいので、サッカード料理、カメラなど共通の趣味をもつ人が集まる興味型コミュニティを目指すのが現実的でしょう。興味ごとに30人から300人くらいの仲間と多層的につながっておくことは可能です。

起きてはほしくないですが、災害を機につながり結び直すこともあるはず。大学三年生のときに阪神・淡路大震災が起きて、緑地を軸とする都市計画を専攻していた私は、建物の判定調査のために被害の大きな地域に入りました。地図に全壊を示す赤鉛筆しか使わない状況で心が折れかけていたとき、川辺に集まった被災者同士が励まし合っている場面に出会いました。途方に暮れるような状況でも、人と人がつながっているのを見て温かい気持ちになったこの経験が、のちにコミュニティデザインに携わるようになったきっかけです。

経済成長一辺倒の時流に逆らうようですが、一度立ち止まって自分のなかの欲求と向き合ってみてほしい。そうして見出した余剰を周りの人に差し出せば、愉しく笑って過ごせる日常、そして災害に遭ってもなんとかなる関係を築くことができると思っています。

(2025年6月2日取材)

「余剰」を交換し合える社会へ

——災害時にも大切な「顔が見える関係」



【人とつながり】